



生きる力を育む学校

◇ 「生きる力」というものが、今、教育で最も大事にされている概念です。この言葉は、平成8年に出された中教審第一次答申の中で、次のように使われていました。

21世紀を担う子どもの資質能力は、「変化の激しいこれからの社会を生きる力にある」。そして、教育は、この子どもの生きる力を求めての「自分さがしの旅」を扶ける営みである。

そして、本当に学校が「子どもに確かな知性を育み、豊かな人間性を醸成し、たくましい心身の健康を培って、社会的に自立し、一人前になってこの世を渡っていける力（生きる力）を育てているか」という問題提起を行いました。その中で、「これから求められる新しい学校像」として、「自己の確立」と「共に生きる」を車の両輪として位置づけ、その上に「社会的に自立」していく過程が、教育の過程にはほかならないと位置づけました。

◇ 学力低下問題で、マスコミの力によって悪者にされてしまった「ゆとり」。この言葉が世の中に出始めた頃、私も当時の文部省が出したものを読んだことがあるのですが、文部省は「ゆとり教育」という言葉は使っていません。文部省が使っていたのは「ゆとりと充実」という文言でした。当時の私は、この「ゆとりと充実」こそ「生きる力」を育てるために必要なものじゃないかと思ったものです。その根拠は、当時読んだ書籍の中に「生きる力とゆとり」とあり、「ゆとりに対する3つの捉え方」として、次のように書かれていたことです。

- ① 「ゆとり」は、生涯学習社会を見据えた資質・能力の育成という観点から、変化の激しい社会を生きていくうえに必要。
- ② 「生きる力」を育むという観点から、学校・家庭・地域が一体となって連携・協力し、子どもを育てていくという姿勢が大事になってくる。
- ③ 五日制の趣旨を生かして、子ども主体の生活を充実し、子どもの興味・関心を生かすために様々な体験が可能な時間を確保していく。それらを通して「生きる力」を育み、そのための「ゆとり」を確保していく。

「ゆとりと充実を生み出す教育課程の創造（明治図書）」

子どもに考える力を育てるには、考える時間がまずもって保障されなければいけません。子どもが個性を思いきり発揮するには、そのための活動時間と場が不可欠です。子どもの主体性、個性を大事にするとき、子ども自らが「時間を支配」することが必要となります。その時間のゆとりが心のゆとりを生み出していくのです。それが「ゆとり」の意味するものだということを、当時の校長先生から教わりました。

◇ 「ゆとり」という言葉が抹殺されてしまったことは残念なことなのですが、その「ゆとり」を創り出すために必要だと言われていたことは、今の時代にもしっかりと受け継がれています。それが、「生きる力を育む学校は、【学びの場としての学校】にならなければならない」ということです。そこで言われていたのが、「学習観の転換」です。そこで2つのことが出されました。1つは、「内容知から方法知への転換」で、もう1

つは、「人間知の回復」というものです。

(1) 内容知から方法知への転換

ここでは、「内容知の大きな壁」として3つの課題が挙げられました。①大量情報時代となり、覚えることがあまりに増大してきたこと。②その時代においては、社会の変化があまりに激しく、知り得た情報や知識がすぐに陳腐化していくこと。③子どもたちの体験不足とあいまって、覚えたこともすぐに忘れるという学力の剥落現象が生じてきていること、の3つです。そこで、「方法知を見直そう」ということが言われました。それは、「方法知（考える力、判断力、問題解決力など）」というものは、時代が変化しようともさほど変わらないこと」「方法知を中核とする学力こそ、自ら意欲を持って学び続けるための基本的な能力となるということ」という考え方が基盤になっていたということです。これが、「非認知能力」の重視という方向につながっています。

(2) 人間知の回復

「学ぶ主体は人間である」という視点に立ち返り、学びというものを見直してみようという動きがありました。

① 学ぶ主体である**自分自身について理解**を進めよう。

自己を探し、発見し、自己のよさを伸ばし、生かしていこうとするとき自ら学ぶ意欲が生まれる。

② 学ぶ対象なり**学習の課題をもっとリアルなもの**にしていこう。

現代社会の課題あるいは生活に根ざした切実なリアリティをもっと強めないかぎり、学習対象が抽象化し、学習は苦行となる。

③ **学校の文化自体**、あるいは**環境自体を転換**していこう。

子どもが主体的に学び生活する学校へと転換する必要性にせまられている。子どもが生活をする場、居場所として、人間的豊かさと彩りに満ちた文化的環境が求められている。

◇ 今、まさに「主体的・対話的で深い学び」という言葉が出てきて、教育の在り方を大きく変えていこうという動きになっていますが、こうやって「生きる力」という概念が生まれた頃のことを見直してみると、その当時から、学校を学びの場とするためには「**共に生きる場としての学校**」という考え方から、「**自立**」と「**共生**」が**キーコンセプト**になることが言われていたわけですね。今の時代、現代青年の問題点として、2つのことが言われています。

「集団埋没化」…自己主張をしない、言われたことしかやれない、自分で判断できず指示待ち型である。自分を表に出すと同調を乱すことになり、排除されたり攻撃されたりする。結果として黙っていることを選ぶ。このことは社会的な無関心を形成する。

「孤独化傾向」…利己的で自己中心的な行動傾向。自分に関係のあるもの、関心のあるものは受け入れるが、そうでないものは排除する。そこには「関係」が失われている。

これらの問題を解決するために、最初に述べた「**自己の確立と共生**」がポイントになるのです。学習自体を「理解」から「交流」「関係」へと「主体的」で「対話的」なものへと展開していくことが求められるということですね。これって、まさしく**アクティブ・ラーニングの考え方**ですよ。このことから、アクティブ・ラーニングという概念は、新しいようで、実は古くから言われてきたものだということですね。

文責：スギタ